

関西紀行その一

生駒連山を越えて

山本秀男



女は地下足袋でかためた足を一歩一歩たしかにふみしめながら下つてきた。「どこまでいきなされる？」

「信貴山まで」

「だったら南にまわれればいいに、むこうからいけば信貴山に上れんこともないけど、ここからでは

高安山に上らねばならんし」

「それは百も承知なんですがネ」

「でもひどい道でつせ、つい最近まではいい道でしたが、いまは信貴山のほうが道がよくなつてしまつたので、この道は廢道になつてしまいましたネ」「それにしても、貴女はなぜ、この山道を歩くんですか？」

「ケープルがなくなつたから、仕方ありませんね。あんた方戻られたほうがよろしいと思ひますがな」

「そうですかな」

正直にいつて女のいうことは偽りだとは思えなかつた。何故なら、最後の人家

のそばにいた老人が、今井氏に地図を出させて道を説明していたことが、すでに思い出されていたからである。爺さんはいつていた。

「五万分の一でなきやわからんで」

つまり廿万分の一の地図では、この山の中腹に長い間暮してきたにもかかわらず、いま私たちが歩いている道が見つからなかつたのだ。自分ではよく歩いていても、その道は、他の大きな道と違つて地図に見出すことができないのである。

それは、とうてい自転車では無理だといふことを裏書きしているようなものだった。あえてこれに逆つたのも、たかが四五百米の山だと思つたからでもあつた。だが、女のいうことを信用しないで、もすむことなら信用したくなかつた。いや女のいうことが、女の弱い足を基準にしたものであればよいと願つた。第一、これほどの山ぐらい越えねばならぬといふ氣負いが何といつても私たちにはあつたのである。

「戻られた方がよろしいと思ひますがな」

と女はもう一度いつた。

「でも登つてみたいんで」

「それじや仕方ないけど、それにしても目的は何や？、自転車の宣伝？」

女にしてみれば、どんな素晴らしいクラブモデルでも自転車は自転車である。その自転車を押してこの山の廢道を登るのは理解に苦しむようだつた。

「旅行が目的」

「へえ、御苦労さんやなあー、あと三分の二登らねばなりませんぜ。マ、氣をつけていきなはれや」

「有難う」

女は、再び地下足袋のあざやかな足をゆつくりと運びながら、下つていつた。

道はそれからますますひどくなつていつた。あとで五万分の一の地図を見たのだが立石越と記してあるところをみればかつては重要な道の一つであつた筈である。それがなぜこんなに悪くなつたか不思議なくらいである。やわらかい土は水でえぐられ、岩石がみにくく露出してゐる。しかも急勾配だ。そんなところをクラブモデルを押してあがるのは、どうみてもまともではないかも知れない。いかに一四・二三kgのクラブモデルでも、またツーリングタイプのアダプトでも、歯がたたない。なによりも心構えが悪かつた。このような道を登るための、心構えというものの持ち合せがなかつたのである。何回もの休憩で私たちは紳士から下着一枚のあらぬない姿に墮ちてい

真新しい地下足袋の紺があざやかに眼にしみる。女は灰色の巾広なタイトスカートをはいていたが、その地下足袋と肩にふりかけた風呂敷包の小さな荷物とが奇妙なコントラストをなしていた。その服装は、この山が決して深くないことを示しているようでもあつたが、道が安易な状態でないことも暗示していた。そんなせんざくはともかく、年は四十にもなるその女が、この山道ではひどく印象的であつた。その頃私たちはアゴを出しかけていたので、なおさらそう思つたのかも知れないが、女と口をきいてみたいという軽い衝動にかられていた。



ちがいない。たとえ小さい山でも、山と名のつくところへは、そうむやみには踏みこまないだろう。大体が大阪を基地にして法隆寺、斑鳩の里から紫雲寺、そ

しい話である。

だが、それほどその日の二人はいつもと変つていた。なんといつても嬉しかつたことよ、今朝と、今朝と、今朝と、



た。身だしなみを保つには、それ相應の条件のいることを馬鹿々々しい思いで知らされていた。

「フロントデイレイラーさえなければ、速だけだったら大和街道を南にまいたに

ちがいない。たとえ小さい山でも、山と名のつくところへは、そうむやみには踏みこまないだろう。大体が大阪を基地にして法隆寺、斑鳩の里から薬師寺、そして奈良から京都へというのが今日のコースの予定であつたのだから。大変なアルバイトを試みたものである。

「フロントデイレイラーが災いした話か……」

先輩がきいたら、不肖の後輩をもつたものだど嘆くに違いないが、ついにそんな言葉も出た。誰が考えたつてフロントデイレイラーが悪いのではなく、二〇万分の一の地図だけで歩いているほうが悪いのである。始めてのところを走るのに五万分の一をもたなくてはならないというところを、ふだん新しくサイクリングをはじめめる人に教えているくせに、それを自分で守らないで、五万をもたぬために災いを味わうということは、まことに羞

しい話である。

だが、それほどにその日の二人はいつもと変つていた。なんといつても嬉しかったことは、今日という今日に限つて、二人がどこをどう走っているか、全国のといへば大げさだが、知つている範囲のサイクリストの誰一人として知つていないからである。雇れリーダーのときは言わずもがなとしても、クラブランでは勿論のこと、プライベートルンでさえ、大いの場合、彼は今日どこを走っているかが、誰かに知られている私たちである。些細なことだが、子供のよう嬉しくてたまらなかつた。だから大阪の日本橋の宿での打合せでも、

「信貴山（しぎさん）という名前が気に入つたから寄つていこう」という具合で、年甲斐もなくうきうきしていた。そして今里の十字路から初めて生駒連山がみえたときは、簡単にあれ

JCA 推薦 オ1号車

ALPS

¥ 30,000

附 馬 品
四 段 競 進 ・ ベ ッ ク
イ ン フ ラ ー
ラ イ ン プ ・ タ イ ヤー

カタログ呈 (8円)

アルプス・クラブマンの真価はシラランサイクリストにお聞き下さい

オーダーメイドの車

Clubman Ace

株式会社 萩原商店 東京都千代田区神田多町1-7 TEL (03) 22288



「たぜ」
 といいながら、やはり楽しんでた。
 道を、野球で有名な八尾高校の前をまっすぐ東にとり、

山本で一旦かぎ型に北へいき再び近鉄高安線の北側を東高野街道へ出て、そのまま服部川に入った。そして、さつきから眼の当りにしていた屏風のような生駒連山に突当つてにわかに登りはじめても、フロントデイレイナーの威力にすつかり、いい気持ちになつて

いた。第一、悪かつたら後戻りすればいいという気持ちもあるし、後戻りしても樹てたプランどろりでなくても、ともかく二人で走りたいところを走れるだけでも嬉しかつたのである。というわけで、五方分の一の地図をもたないために突いを喫してしまつたので

ある。女の勧告にしたがつて戻ると手が残されてはいる。だが、それはそれ「男の子」だという気持ちがしきりに働く。そしてなおもコツコツと押し、とうとう頂上までの道をとることになつてしまつた。時間は正午をすぎていた。食物はチーズだけである。大事に二人でチーズの一片だけを食べたときは、さすがに今は山の中だという気がした。それに

「屏風みたいだなあ、あれを登るんは関東のものではない。今井氏の姿がまた私にとつては素晴しかった。ツイードのペレーハンティングに紺の長袖のシャツ、そしてツイードのブラスフオアのニツカース、模様なしの酒

は関東のものではない。今井氏の姿がまた私にとつては素晴しかった。ツイードのペレーハンティングに紺の長袖のシャツ、そしてツイードのブラスフオアのニツカース、模様なしの酒

しても高安山への道はひどくこたえたがそれだけに忘れられぬ道である。

フロントデイレイナーも及ばなくなるころ、とりわけ素晴らしい眺めが得られる。最後の人家から百米一寸しか離れていない

だ。電線はいぜんとして続いているが、もはや自転車で登れる道はこれでありである。当然のことだが車をおいて一服という手続をとつた。

どうだろう、つきまほどダブルチェンホイールをローに落したばかりなのに、もう河内平野が展げてはいるではないか。日頃私たちの入りなれている関東の山では、こんな展望は稀である。天候にめぐまれてはいるほうだったが、それだけに南北に長い河内平野は広々としてみえた。

一めに黄の絵具でなめた後に、黒、クリム、白赤緑などの色を思うがままにあらつたやうである。西の果ては工場の煙もあるだろうが、全くけぶつており、わずかに大阪湾が認められるという具合だつた。六甲も見えし、京都の方まで伸びる山々がみえる。もつとよく晴れば淡路島もみられるというが、その日にあいにくであつた。

空しく昆虫採集カバンを小脇にかかえ、黙つてこの山の頂に立つているのかわからなかつた。ただいえることは、私達と感ずるところに違いはあるが、大和

フリーホイール
 各種ハブブル
 三、四、五段変速ギヤ
 内掘式バンドブレーキ
 小ギヤ

NO.4350

株式会社 三光舎
 東京都板橋区志村中台町 1
 電話板橋(96)00871839

また河内平野は黄色ではあつたが、それでもよくみると、人々が何をして暮しているかをみきわめるには困難であつた。畑の面積は広いが、町があり、畑の中に高層のアパートがあり、工場があり決して農家だけの平野ではない。大阪という化物のように大きい町から、はみで来たような、いろいろなもの田園をいろいろとつているのだ。

それにしても鮮やかなのは河内平野が終るところであつた。私たちの立つ高安山の中腹から見下すと、それがはつきりわかる。深い緑の松にかこまれた幾つもの小さな貯水池は、沈潜した色をたたえて空を映している。黄色い平野はこゝでははつきり区切られている。そこには渾然とした平野のいろどりを寄せつけたい敵しさがただよっているようにもみえた。そして貯水池は山の中腹のかなり上までも作られているのだ。こういう風景

ちら側は屏風ではなく、人々がどこにでも働いていた。それにしても関東と違うのは家である。白い漆喰の壁は有福にみえた。

ちら側は屏風ではなく、人々がどこにでも働いていた。それにしても関東と違うのは家である。白い漆喰の壁は有福にみえた。

ちら側は屏風ではなく、人々がどこにでも働いていた。それにしても関東と違うのは家である。白い漆喰の壁は有福にみえた。

は関東のものではない。

今井氏の姿がまた私にとつては素晴しかった。ツイードのベレーハンチングに紺の長袖のシャツ、そしてツイードのブラスフオアのニツカース、模様なしの酒落たニツカーホース、ツリーングタイプ

の皮靴といういでたちであるが、何といつても腰に吊した皮のパイプ入れがひょうひょうとしていた。フアインダーの中にとらえて今井氏を追った。或は演出をしながら。余談ではあるが、抵個派サイクリスト今井彰彦氏の風貌を連作としてまとめたという企画を、すでにかなり前から樹ていたので、これからの苦しい登りなどはさらに考えず、ひたすらにシャツターをきつていたのもこの場所であつた。今月号の風貌も実はその時の一枚である。

西側とは比べようもないほどやわらかい感じである。平群（ヘグリ）は日本武尊の伝説を秘めるにふさわしい語感だと思つていたが、東の山の下になる。山ひだが大きくやわらかく、いくつもの部落を仕切つていようだつた。

一人の大学生に会つたのは高安山の一寸手前の神社のある見晴しのいい尾根であつた。彼は黒サージのズボンのすそを靴下でくり、バスケットシューズをはいていた。上は白いカッターシャツで角帽をかぶつていた。背中のリュックサックには大した荷物を入れていないようだが、小脇にかかえた昆虫採集カバンの塗料のはげかかつたのがその学生には一番ピツタリした持物だつた。

「信貴山から法隆寺へ廻りたいんですけどどの道をとればいいですか？」
道は笹に覆られていたので、学生の沈黙の世界を破つては悪いと思つたが聞いてみた。ここでも二十万分之一の地図は山容を知ると、下に光つてい川が何川かを知るにしか役立たない。山をまいて、道はどう降りていくか見当がつかなくなつてしまつた。そして笹に覆われた道はどう考えても、いまは利用されることの少ない道としか思えなかつたから。

学生は、そのいでたちが地味であるのにまことにふさわしいような話し方をして、私たちに道を教えた。彼も私たちが何のためここを通るか恐らく不思議に思えたらうが、私にしてもなんの為に彼が

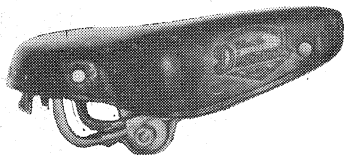
空しく昆虫採集カバンを小脇にかかえ、黙つてこの山の頂に立つていのかわからなかつた。たたいえることは、私たちと感ずるところに違いはあろうが、大和の国原をみて、その静かな風景に魅せられていたのであろう。彼は地理にくわしく、私たちは珍らしげに、大和をみていたのである。もつと彼と話をしてみたかつたが、彼の思考の世界をこわしたくないので、やめた。

空しく昆虫採集カバンを小脇にかかえ、黙つてこの山の頂に立つていのかわからなかつた。たたいえることは、私たちと感ずるところに違いはあろうが、大和の国原をみて、その静かな風景に魅せられていたのであろう。彼は地理にくわしく、私たちは珍らしげに、大和をみていたのである。もつと彼と話をしてみたかつたが、彼の思考の世界をこわしたくないので、やめた。

J.C.A. 推薦 サドル

ツアーカント

セミテリー型



● 姉妹品 17型 150型 ほか ●

関東のサドル

株式会社 関東サドル製作工所

東京都墨田区吾嬬町西5ノ74
電話 城東 2339・7801